

John Moss

A History of English Placenames and Where They Came From

Barnsley: Pen and Sword History, 2020, xix + 388 pp.

家入 葉子

イギリスの地名研究は、伝統的で確立した分野である。1923 年に設立された English Place-Name Society（現在の拠点は University of Nottingham）を中心に、現在も各地域の地名研究が継続中で、その成果が次々と公開されている。1969 年にさかのぼる *Journal of the English Place-Name Society* が現在も定期的に刊行されているほか、地域ごとの地名に関する情報をまとめた成果や地名辞典等の出版も相次いでいる。¹

地名研究は、歴史学や地域研究を含む学際的な分野であり、中世英語英文学との関連では、語源研究や方言研究はもとより、言語接触を扱う社会言語学的な研究、文学作品の中で使用される地名の研究、作品とその写本の伝播に関する研究など、各方面とつながりがある。たとえば方言研究では、20 世紀後半に *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English (LALME)* (1986) が刊行され、これ以降は文字や綴り字を基本とする方言記述の潮流が広く受け入れられるようになったが、それ以前には、地名・人名は方言記述においてとりわけ重要なよりどころとされていた。Kristensson (1987) 等に見られる方言研究の方法は、その典型であると言える。一方、新たな潮流の広がりを予告する論文としては McIntosh (1963) を挙げることができ、20 世紀の半ば過ぎにまでさかのぼる。² *LALME* が完成するよりも約四半世紀早く公開されたものであり、この分野の研究がいかに時間を要する作業に支えられたものであるか、またそれを前提に長期的な視点をもって遂行されてきたかを物語っていると言えよう。

一方で、地名研究は広く一般に開かれた分野でもある。English Place-Name Society がそのホームページ上でも記載しているように、地名への関心は専門分野の研究者だけのものではない。すなわち地名研究は、地域や地名に関心を有するあらゆる人々に参加の機会を提供する。地名研究の成果として刊行されてきた地名辞典等の出版物についても、必ずしも研究者ではない一般の読者を対象としたものも少なくない。

以上のような地名研究を巡る研究環境を踏まえた上で *A History of English Placenames and Where They Came From* を眺めると、まず目に留まるのが著者の経歴である。本書のカバーに記された著者紹介では、

JOHN MOSS studied Fine Arts and English in Wolverhampton and Manchester Art Schools, before taking early retirement after teaching and lecturing in Art & Design. He founded a Graphic Design company in 1997. Retired at last, he began writing a science fiction trilogy in 2013. Following

Great British Family Names and Their History, this is his second book for Pen & Sword.

と記載されている。英語も専攻分野の 1 つとされてはいるものの、著者の専門分野は基本的には美術、デザインであり、一方で近年の著書についての記述から、その他の多彩な方面での活躍が顕著であることもわかる。

したがって、本書を専門分野のみの視座から評することはある意味で一方向的であり、公平な扱いではないだろうと感じる。確かに、気になるところはある。たとえば、本文中の各所に見られる *Anglo-Saxon Chronicle* からの引用部分では、原文による記載は省略されており、現代英語訳のみが与えられる (pp. 10-11 など)。また、引用であることは明記され参考文献表等には先行研究についての情報も記載されているが、引用箇所において具体的なページ等の記載がないため、どの現代英語訳を使用しているかがわかりにくい。同様に、以下のようなやや漠然とした記述もある。英語のどのような側面がどの程度そうであるのか、わかりにくいと感じる読者も少なくないだろう。

Over time, a gradual synthesis of Old English, Scandinavian and Norman French took place, to emerge as Middle English, which in a rudimentary way began to resemble something akin to the Modern English we speak today. (p. 13)

ここでは、学際的な環境の中で異なる目的のために書き上げられた本書の性質を考慮し、さらなる細部に焦点を当てるのではなく、むしろ本書の特徴を明らかにしながら、その紹介に重点を置くことにしたい。

まず本書の構成を見ると、前書きや参考文献等を除いて、全体は 15 の Part から構成されており、その詳細は以下の通りである。

Part One	Common English Placename Elements (pp. 1-7)
Part Two	Migrations and Invasions (pp. 8-15)
Part Three	Placename Origins (pp. 16-19)
Part Four	Land Ownership and Tenancy (pp. 20-22)
Part Five	The North-East (pp. 23-55)
Part Six	The North-West (pp. 56-105)
Part Seven	The West Midlands (pp. 106-149)
Part Eight	The East Midlands (pp. 150-178)
Part Nine	East Anglia (pp. 179-211)
Part Ten	The Home Counties (pp. 212-240)

Part Eleven	Greater London (pp. 241-261)
Part Twelve	The South-East (pp. 262-285)
Part Thirteen	The South-West (pp. 286-332)
Part Fourteen	The British Islands (pp. 333-340)
Part Fifteen	Novel, Odd, and Unusual Placenames (pp. 341-365)

この構成からもわかるように、本書はそのタイトルから得られるイメージとは若干異なり、基本的には地名辞典の新たな 1 冊であると考えてよさそうである。導入部では、たしかにイングランドの地名全般にかかわる歴史や語源的な解説もなされている (Part One ～ Part Four) が、それ以降の 300 ページ以上にわたる主要部分は、地域ごとの地名のリストとその解説である。

ただし、一般的な地名辞典とは異なる特徴もある。最大の特徴は、本書にストーリー性があることである。すなわち、読者に語りかける地名辞典である。Leeds を例に、一般的な地名辞典である Mills (2011)、および専門性が高い Watts et al. (2004) と比較対照しながら、本書の記述を見ることにする。Mills (2011) の Leeds の項目は、以下のように記述されている。

Leeds. *Loidis* 731, *Ledes* 1086 (DB). A Celtic name, originally *Lādenses*, meaning ‘people living by the strongly flowing river’. (p. 292)

ケルト語に由来する古い地名であることが、簡潔に示されている。³一方、Watts et al. (2004) における Leeds の記述は、

NYorks SE 3034 ‘(The district of) the people living beside the river *Lať*. *Loidis* [c.731]8th BHE, [c.890]c.1000 OEBede, 12th, *Ledes* 1086-1470, *Ledis* -ys 1175-1548, *Leeds* from 1518. Brit **Lāt*- *Lādenses* ‘the people of the r. **Lāt*-. This must have been an earlier name for the r. AIRE related to W *llawd*, Ir *láth* ‘heat (in animals), ardour, passion’, meaning something like ‘the boiling or violent river’. The development was **Lādenses* > late Brit **Lōdeses* borrowed as PrOE **Lōdis* which underwent *i* mutation through the stage *Loidis* to *Lēdes*. YW iv.124, Antiquity 20.209. (p. 367)

となっている。⁴形態上の変化が時代を追いながら丁寧に記載されており、その過程で起こった音韻変化への言及もあり、専門性が高く網羅的である。

これに対して、本書での記述は、

The *Domesday Book* makes only a passing reference to Ledes, as a small habitation apparently of little value. It had been known as Loidis or Leodis since the early eighth century, when Bede included it in his *Ecclesiastical History* and perhaps it was known even earlier as Ladenses. The name probably derives from the Brythonic Celtic word ‘Ladenses’, meaning ‘people of the fast-flowing river’, in reference to the River Aire that runs through the city, although it has also been suggested that it might stem as a derivative of Welsh word ‘lloed’, simply meaning ‘a place’. (p. 43)

となっている。記載されている内容は、先に挙げた地名辞典のものと重なる部分が多いが、本書には、取り上げる地名の歴史をストーリーとして提供しようとする姿勢を鮮明に読み取ることができる。

さらに本書を他の地名辞典と異なるものになっているのは、地名の提示方法である。地名をアルファベット順に並べているところは他の地名辞典と同じであるが、上に示したように、North-West, East Midlands, East Anglia というような地域ごとのくくりが設けられている。このため全体としては地名を機械的に並べて、その解説を加える地名辞典でありながら、読書にも耐える地名辞典となっている。地域ごとのくくりにより、読者は必然的にイギリスの地図を意識しながら読み進めることになり、辞書にありがちな単調さが緩和されている。すなわち本書を純粋に地名辞典と見るならば、かなりユニークな地名辞典であると言える。

しかしこれは同時に、本書を純粋に地名辞典として使用する場合には、若干使いにくいと感じさせる点でもある。特定の地名の情報を得たい場合には、(1) その地名がどの地域のものであるかを確認してから当該の地域のページを開き、そこからアルファベット順に地名を探す、あるいは(2) 末尾に付された索引で地名がどのページに記載されているかを確認し、そのページを開く、のどちらかの作業が必要になる。Burton のように、イギリス全土に何か所も見られるような地名の場合には、記載ページが散在しているので、索引からの検索にも時間がかかり、また異なる地域に存在する Burton の相互比較も容易ではない。

たとえば通常の地名辞典であれば、上で言及した Leeds と Kent の Leeds が前後に並んでいるため、Kent の Leeds、すなわち“Kent. *Esledes* 1086 (DB), *Hledes* c.1100. Possibly from a stream-name, OE **hȝde* ‘the loud one’” (Mills 2011: 292)との比較が可能となる場所である。これにより同じ地名であっても、その由来が異なることを確認することができる。これが本書では難しい。

しかしながら、本書、すなわち *A History of English Placenames and Where They Came From* は、そもそもタイトルに地名辞典を掲げているわけではない。したがって、形式的には確かに地名辞典であるものの、純粋な地名辞典としての活用となると、やはり本来の目的からはずれてしまうのかもしれない。ちなみに本書では、Kent の Leeds への記載はない。

紙幅の制約の中で興味を喚起しながら地名の歴史を語るためには、扱う地名の数を限定するのもやむを得なかったのであろう。

以上のように、本書は編纂と執筆の間を行き来しながら、両者の作業を通して完成したユニークな位置づけの著書であると言える。著者自身が、学際的な環境の中で研究を続けてきたことが、本書の面白さにつながっているのかもしれない。おそらくその最適な利用方法は、読むように地名を引くことでイギリスの地名全般への関心をはぐくみ、歴史という時間軸と地理的な空間軸とを交差させて楽しむことではないかと思う。簡単に地名の語源を知りたい場合、あるいはより専門的に地名の由来を確認したい場合には、タイトルに *dictionary of English place-names* が掲げられている別の辞典を使用することができる。一方、本書には、感情に語りかける側面がある。通常の地名辞典とは異なる形で利用することで、その面白さを最大限に引き出すことができるのではないだろうか。

参考文献

- Kristensson, Gillis. *A Survey of Middle English Dialects 1290-1350: The West Midland Counties*. Lund: Lund UP, 1987.
- LALME = *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English*. Ed. Angus McIntosh, Michael L. Samuels, Michael Benskin, with the assistance of Margaret Laing and Keith Williamson, 4 vols. Aberdeen: Aberdeen UP, 1986.
- McIntosh, Angus. "A New Approach to Middle English Dialectology." *English Studies* 44 (1963): 1-11.
- Mills, A. D. *A Dictionary of British Place-Names*. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Watts, Victor, John Insley, and Margaret Gelling, eds. *The Cambridge Dictionary of English Place-Names: Based on the Collections of the English Place-Name Society*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Williamson, Keith. "Middle English: Dialects." *English Historical Linguistics: An International Handbook*, volume 1. Ed Alexander Bergs and Laurel J. Brinton. Berlin: De Gruyter Mouton, 2012, 480-505.

¹ 出版物のさらなる詳細については、

<<https://www.nottingham.ac.uk/research/groups/epns/index.aspx>> を参照。

² イギリスの史的方言研究の潮流の変化については、Williamson (2012)も参照。

³ DB = Domesday Book

⁴ 略号は、BHE = Bede's *Ecclesiastical History of the English People*, ed. B. Colgrave and R. A. B. Mynors (Oxford, 1969); OEBede = *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History*, ed. T. Miller, Early English Text Society OS 95, 96 (London, 1890-1891); YW = A. H. Smith, *The Place-Names of the West Riding of Yorkshire*, 8 vols. (Cambridge, 1961-1963); Antiquity = *Antiquity: a quarterly review of archaeology* (cf.

Watts et al. 2004: xx-xli).